モノ・グラフ

八重山象形文字・カイダー字の新しい発見

マーク・ローザ（Mark Rosa）
東京大学大学院　人文社会系研究科　博士課程

バジル・チェンバレンが一九世紀末に著した琉球言語資料に刺激を受け、同氏が語る「与那国の不思議な象形文字」について深く研究する。

わたしは民博の収蔵庫にあった一連のカイダー字を見る機会を得た。それは標本番号がK2808、「家記号」、「琉球与那国」と記された紙資料三点である。折り紙の残欠二枚とコヨリ仮綴じのもの一綴である。

カイダー字とは、八重山の島民が大昔からあったバラザン（藁算）やスーチューマ（蘇州碼）を改善して機能を拡大させ、色々な内容を表すことが出来る表記法で、記票文字といわれるものである。

残存資料はわずか数十点

一六〇九年の薩摩藩の琉球侵攻以降、従来重くなかった人頭税が大幅に増加し、琉球王朝を通して八重山の一五歳から五〇歳までの人がその対象となり、まるで奴隷のような生活をおくることとなった。これがきっかけで、島民が人頭税として徴収されたものを表すのにカイダー字を用いた。その目的は食料や動物と数を示すことにあった。

一八七九年、明治政府による琉球処分のあとも人頭税は一九〇三年まで続いた。それがようやく廃止になってからは、カイダー字を使う機会が急速に減り、表記法も廃れ始めた。

一九一〇年代にはまだ使われていたようだが、一九三〇年代になると研究者の説明が「過去形」に変わり、今は八十代以上の老人にかすかな知識が残されているだけである。

カイダー字の種類は、（一）家紋のように屋号を示すダーハン（家判）、（二）スーチューマに基づいた数量を示す文字、そして（三）島民が独自に作った象形文字である。

カイダー字で書いてある資料の残存例が非常に少なく、戦前に発見されたもののコピーを含めても数十件にもならない。板札も紙切れも数枚ずつしかなく、葉へ記載された資料は一切現存していない。

したがって、民博における発見は、カイダー字を研究するうえで貴重なテキスト資料となる。まったく新しい発見であるこれら資料について、以下に紹介してみたい。

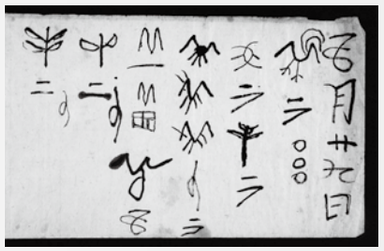
文字を解読すると……

第一の資料（図1）には、ダーハンは一切現れないので、一家がある年の五月二九日に保有していたもの、または寄付したものの記録かと思われる。今までの資料を参考にし、解読してみよう。

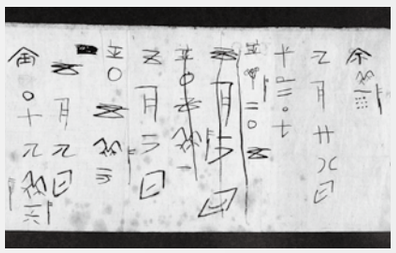
五行目の「酒」の字は、通常の形とされている𠫑ではなく、ジグザグ線のみという省略された形になっている。『琉球古来の数学』を著した数学者の矢袋喜一氏が与那国島を訪ねた一九一〇年代の資料にはこのような形になっており、竹富島の言い伝えにもこのような形が見られる。

なお、「五合」は□が五回書いてあるでもなく、「□五」でもない、五つの四角がくっ付いているような簡略化した形になっている。

図1　ある一家の「五月廿九日」の記録
（横、折り紙1枚、縦13.2、横37.5センチ）



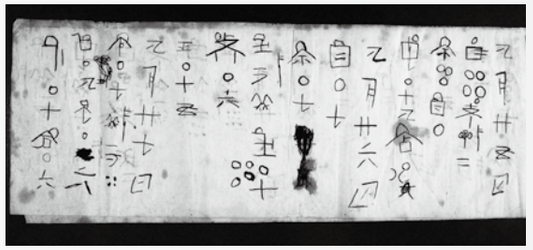
五月廿九日
鶏 三 俵俵俵
魚 三 菜葉 三
雄馬 山羊 山羊 斤 三
酒 一（升）酒 五合 冬瓜 五
大根 二斤
菜葉 二斤



玉城 鶏 一 ⁝⁝⁝
四月廿八日
入与那国 油一 俵 七
大浜（？）牛蒡 二 俵 五
五月 三 日
大浜（？）俵 十 五 鶏 一 十
五月三日
大浜（？）俵 五 鶏 一 百
（取消）
五 月 四 日
入高島 米 十九 鶏 一六

図2　複数の家族に関する記録
（横、折り紙1枚、縦13.5、横35.5センチ）

図3　複数の家族に関する記録　〈第一紙オモテ〉



四 月 廿 五 日
東迎（一石）大高 牛蒡 二
「d1」俵俵俵 小嶺 俵
吉元 俵十九 入崎 八
四 月 廿 六 日
小嶺 俵 七
玉城 俵 七（取消）
「d2」三 鶏「d2」俵 石 十
佐久本 俵 六
大浜（？）俵 十 五
四 月 廿 七 日
「d3」俵 七 鶏 一 百 ∴
「d4」俵 四「d5」俵 六
「d6」俵 十 前花 俵 六

複数家族の寄付の記録

次の二つは、複数の家族（屋号）の寄付に関する記録である。全員が与那国島の北にある祖納（そない）集落に暮らしているようである。

一つは複数のダーハンが現れ、いくつかの家族の寄付の記録である（図2）。一行目は失われているページの続きだろう。

最初の行に表れる「九つの点」は、今まで見たことのない「字」で今のところ意味不明であり、四行目のダーハンは「大浜」に見えるが、不確かである。この大浜家は石垣在住ではなく、与那国島祖納の一家である。

いくつかの字の右側に傍点のように「量り」の字が付いている。この字の存在は過去の資料にみることができるが、かなり崩した形の「量り」の字が「斤」を表すこともあるので、「～斤」を示す可能性が高い。ただ「鶏」と「一百」の傍に見られるような場合は「量った」ではないかとも考えられる。

この一枚は次の「コヨリ仮綴じのもの一綴」とさらに繋がっている可能性が高い。同一人物の手書きのようである。

コヨリ仮綴じの資料

図3～5に示す一綴の資料（コヨリ仮綴じ、表紙とも五丁、縦13・5、横35・5センチ、本紙二丁は折り紙）は、これまで発見されたカイダー字を含む資料のなかでは一番長い例である。合計一七二字のうち、日付、ダーハン、スーチューマ、動物なども含まれている。

なお、いくつかのダーハンに丸のような記号が付いている。「○」は元々「一俵」という意味で、何を示すかがはっきり書いていなければ、通常「米～俵」を示す。この場合は、各家族が必ず米を納めていないので、書き手がチェックとして付けたかもしれない。

ダーハンについては与那国教育委員会の資料を参考にしたが、未解読のものは「dxx」のような記号を付けた。

日付は第一の資料にある例よりほぼ一か月前だが、同一人物の手書きかどうかは不明である。

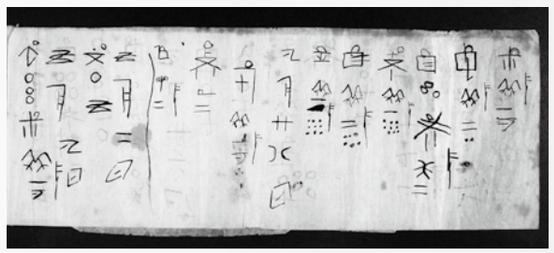
図4の右から二行目から八行目には二、三、六、九個の点を並べた未解読の字が見られる。鶏の数の直後に見られることが多く、米の何俵を表す可能性はあるが、それならば点でなく丸のはずであり、九つのグループ（一石一俵）は現れるはずがない（図3の二及び八行の「四俵」の合体を参照）。丸に近い楕円の「卵」の字もあり、鶏は普通に卵を産むのを考慮すると、卵を示すこともあり得る。

この一行目は例外として、「量り／斤」の字が鶏と数量の右側に書いてある。向きが逆になっているのは他では見られない例である。

民博にあるカイダー字の資料のうち、バイリンガル（漢字とカイダー字）の板札は二〇〇六年にすでに解読してあるが、今まで知られていなかった紙の資料三点が、「読める人を待って眠っていた」と民博の佐々木利和教授は言う。

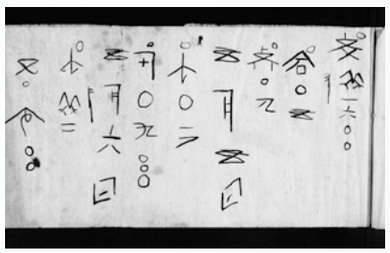
カイダー字資料の新しい発見により、八重山の人びとの知恵や、当時の人々の文字の意識がさらに評価されることを期待している。

図4　複数の家族に関する記録2　〈第一紙ウラ〉



「d7」鶏 一 百
吉元 鶏 二 ∴
小嶺 俵俵俵 「d8」魚 二
大高 鶏 一 ⁝⁝⁝
東迎（？）鶏 二 ⁝⁝⁝
「d9」鶏 一 ⁝⁝⁝
四 月 廿 八 日
「d10」鶏 一 百 ∴
佐久本 板 二
「d4」牛蒡 二
五 月 二 日
東小浜 俵 五
五 月 四 日
「d5」俵俵俵 「d7」鶏 一百

図5　複数の家族に関する記録3〈第二紙オモテ〉



松村 鶏 一 六 俵俵
前花 俵 五
佐久本 俵 四
五 月 五 日
古見 俵 三
「d11」俵 九 俵俵俵
五 月 六 日
古見 鶏 二
「d12」（俵？）「d3」俵俵